

秋山駿

人生の検証

新潮社

人生の検証



秋山
駿

新潮社



ISBN4-10-375701-9 C0095

© Shun Akiyama 1990, Printed in Japan

じんせい けんしやう
人生の検証

発行——一九九〇年三月二五日

三刷——一九九〇年六月一〇日

著者——秋山 駿
あきやま しゆん

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

所在地——162 東京都新宿区矢来町七一

電話——
業務部(03)二六六—五一—
編集部(03)二六六—五四—

振替——東京四—八〇八

印刷所——東洋印刷株式会社

製本所——株式会社大進堂

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

死	心	美	悪	夷	家	金	性	身	友	恋	食
205	187	168	149	131	113	95	78	60	41	23	5

あとがき

人生の検証

食

食。これは私が黙殺してきたテーマだ。なぜ黙殺するのか。

食べなければ生きてゆかれぬ。生存の公理である。しかし、そう思う度毎に、この公理が私には不愉快だった。忌々しかった。全身を挙げて反抗したいと思う。が、すぐ自己矛盾に陥る。なぜなら、自分の生を生きようと思うからそう考えるのに、食べなければ生きられないのだから。

そこでこの問題は黙殺することにした。だから、食についての記憶というものがほとんどない。いや、ただそう言ったのでは嘘になる。それは十五歳から四十歳にかけて、私の意思の方が自分の肉体より強かったその間のことだ。以後の記憶は僅にある。何かを食べてこれは美味であるとか感ずるようになったからだ。そのことに私は自分の墮落を読む。

しかし、大切なのは、それ以前の方だろう。なぜ、食べなければ生きてゆかれぬという公理にそれほど反抗しなかったのか。明らかに、その根は、私の内部の、父親なるものへの思い、母親なるものへの思い、というところに根差している。

父親とは何か、あるいは母親とは何か、と、いつか人は問うらしい。食への態度は、その問い

と関っている。ただし私は、その起点が、父母とは何かと意識的に問う少年期に発しているのか、それとも無意識的に、どうか本能的に問う幼年期に発しているのかを、いまはもう、自分の経験の流れの中に読むことはできない。おかしなものだ。私は自分の生の急所に無知なままに生きている。

二十年くらい前から、ときおり新聞紙上で、拒食児童また過食児童の記事を読むと、私はその紙面を取っておいた。関心があつたからだ。可哀そうに、と私は思った。彼等、拒食・過食の少女は、私がそつと触れただけで黙殺してしまった問題に、正面から頭をぶち当て、全身で体当たりしているのだ。そして私の思うところ、この問題は、解けはしないのである。というのも、問題の内容が錯綜しているからだ。

私は幼稚園に行くようになっても母親の乳房に縋っているような甘つたれで、親戚中の笑ひ者だった。そういうとき、食べることと自分との間には何の背反もない。まったく自然である。そしてそれは、母親と一緒にいる、ということとまったく同義だ。お母さん、と言えば、食べ物はそのにある。まったく無為のうちに食べて充ち足りている。いかなる意識的な反省もない。甘美な記憶だ。人が思う幸福の原型はここに発するのではあるまいか。私は後に、考えるということ、この自然この幸福から人が引き剝がされる、その距離の意識化のことだと考えようとしたことがある。

しかし、そこへ父親が登場する。父なるものは言う。それでは生きてゆかれぬ。食べなければ生きてゆかれぬ。食べるためには社会に出て有用な人間にならねばならぬ、と。

おっしゃるとおりです、お父さんと、すぐ言う訳にはいかない。なぜか、と思う。私がそんな声を聴いたのはいつ頃だろう、三歳か、五歳か？ 私が読んだ若干の犯行者・病者の言葉によれば、そんな年頃で聴いた意外な一つの言葉が、その後の彼の生の感触を決定するのに、大きく影響しているようだ。言葉は怖ろしい。むしろその言葉は、自分に直接言われるのではなく、他人事である。なにしろ幼児期は、自分が生きようとする現実世界のことを知ろうとして、月面に着陸した宇宙飛行士より、よほど高度に全身で緊張しているだろうから。

父の声は、食べるということを、ぜんぜん未知の、意味も解らぬ新しい二つの言葉に分けてしまふ。「社会」とは何だろうか、「有用である」とはどういうことか。そして、この二つは、どういう方程式を描くのか。

ここで、混乱が生ずる。混乱は、父と共にいたのか、母と共にいたのか、という対立ではない。そんなことなら簡単だ。意思において決断すればよい。

混乱は、父の声も本当なら、母の声（声ではなく、乳房だが）も本当である、と思うところから生ずる。そこから困惑が始まる。

あんまり当たり前の話だ。人は空気を呼吸して生きると改めて言ってみるように、ばかばかしい話だ、と言われそうだ。

しかし私は、この、食べなければ生きてゆかれぬ、というところから、父なるものと母なるものの深い裂け目が生ずる、と思うのだ。どだいこの、食べなければ生きてゆかれぬという言葉は、われわれの生が最初に発見する「否定」の感触であろう。面白いことだ。生にもっとも近い原型

的な行為とは、食べるといふことだろうが、そこにこそ、根本的な否定、死の感触が、最初に閃くのだから。

母と自分との一体感の中に、父の声が割り込んできて引き裂がす。ゆえに父を憎む。それなら解り易い。が、そんな簡単な図に心はならない。

母と自分とが一体である、と改めて気が付くと、母の愛は、何か人間の普通離れしたたいへん有難いものだと思う。しかし、有難さの度が深くなればなるほど、逆に同時に、母のそれだけでは生きてゆけぬと思うことによつて、(何と言えよいいのか) 母を憎むようになる。

父の声が正しくて強そうだということとは直ちに知られる。生きる道を示してくれるのだからこれも有難い。が、有難いのはいいが、なんだか生きるのは実に面倒臭そうだなという予感に早くも怯えて、父を憎むようになる。

この二つは、対立でもなく、背反でもなく、分裂でもない。ただし、裂け目が開く。そこを凝視すると穴はしだいに深くなる。

母を愛し・母を憎み、父を愛し・父を憎み、母のゆえに父を愛し・父を憎み、父のゆえに母を愛し・母を憎む……というような、幾重にも屈折し錯綜した感情の塊が、一挙に出現する。襲ってくる。

いったいどうしたらよいのか。自分というものが解らなくなってくる。ただ混乱があるばかり。食べる、といふことの根本には、母なるもの父なるものへの深い思いが、その根と捩れ合っている。

食についての日常的な記憶はまったく乏しい。

私は小学校に上がる前は病氣ばかりしていたので、母親の過保護の下にあった。だから食べ物はほぼ自分の望み通りであった。今日の家庭内で料理の主導権を握っているという甘ったれの子供と同じだ。

しかし、奇妙なことに、いまでもただ一つ鮮明に想い起こせるのは、病院の食事だ。腎臓を患って何十日か入院したあげく、今日から少量の塩分を許すということで、御飯にただパラパラと塩をかけて食べたが、いやその美味だったこと！

後に、戦後二十七年かグアム島のジャングルに潜伏していた横井軍曹が、発見されたとき、初めて人に訴えたのが「塩が欲しい、切れ物が欲しい」という声であった、というのを新聞で読んだとき、一種の感動が私の胸を走った。そうか、塩か。

「とにかく昔トロヤに出陣した英雄たちは、自分の体を鍛練するかのごとくに簡素節儉の食事に慣れ、食事に快楽を添えるいっさいのもの余分なものを去り、(略)その英雄たちにしてなお、塩なしでは肉を食べられなかった、ということはずなわち、塩こそただ一つ不可欠の調味料だということの証拠だろう」(「アルタルコス『食卓談集』柳沼重剛編訳)

もつとも、塩が印象的だったのは、私の場合こんな意味のものではあるまい。たぶん、病院の

食事、塩の許しというそれが、母親から引き剥がされた後の父親的なもの、社会の感觸の結晶として感ぜられたのだろう。

ひどい偏食だったので、親戚の家に行くに困った。食事のときは緊張を強いられた。未知の物、意外な味は、あつと思つて目をつむつて呑み込んでも、吐き気が不意に襲ってくるから。小学校四年の臨海学校の時、皿の焼き魚を、隣の同級生がバリバリと頭から噛んで食べるのを見て、私は驚嘆した。真似して一口噛んでみたが異様な感じがしたので、先生の目を盗んで捨ててしまつた。よく覚えているところをみると、自分をひどく恥じたのに違いない。

その羞恥はいまも揺曳していて消えない。何の羞恥か。食べられないのだから弱者であるにもかかわらず、そこが奇妙に転倒して、食べられない方が一見お坊ちゃん的に見える、という世間の田舎芝居的な見方がある。そんな見方が忌々しいし、そんな見方があると意識している自分も忌々しい、にもかかわらず、結局そんな振舞いに見られてしまう行為を犯したことへの羞恥。

いや、これは三文小説的解釈というものだ。本当はもつと違うことじゃないか。食べるということには、何か深い羞恥がある。これは一種の原型的な感情だと思ふ。独りで食べる場合にも、ときにそれは感覺される。

大勢の仲間で、人前で食べる、つまり社会的形式で食べる時、不意にその羞恥が鋭く露出する、と、そういうことではなかつたか。

こんな私を叩き直してくれたのが、戦争である。

そう言うのと、しばしばあなたは戦争肯定派ですかと訊かれるので閉口するが、経験の話なので仕方がない。

偏食などと言つてはいられない。何でも食べた。庭を畠にしてのサツマ芋の葉と茎、カボチャの小さな実、乾燥バナナ、岩塩、コンクリートの破片のような海草の干し固めたもの（ひどく不味い）、ガソリン芋……。

軍需工場へ行つていたので、コーリヤンの昼食がある。あれは中年者がよく噛まないで食べる、消化不良をおこして下痢になり、そのぶん栄養失調になると言われていたが、なに、こうなると私は現金な奴で、さつと呑み込んで素早く食べ、また列に並んで二杯目を食べた。別に下痢もしなかった。

中学二年のとき、千葉から東京に寄宿していた同級生が、実家に遊びに来いと言う。行つて、蛙の皮を剥いて川に入れると、ザリガニが面白いように採れる。一時間でバケツ一杯くらいになつてしまう。ああ面白かったと帰ろうとすると、彼が、これは本当は食べられるのだよと言う。それじゃ、と持つて帰つて尻尾の部分之母に茹でてもらうと、けっこう食べられた。

どだいその前にわれわれは、学校の生物の時間に、中国大陸へ行つたらこういうものも食べねばならぬのだからと、トンボやセミを生で食べさせられた。むろん、愛嬌ある教師のお座興である。が、生きたバッタをパクツとやった勇氣ある奴がいたのには驚いた。

しかし、その後の軍事教練で、もうその頃は元氣な士官の姿はなく、負傷帰りの軍曹さんが、お腹に弾丸が当たるといかに苦しい死か、突撃では真つ先に行くなとか、戦争より銃や短剣でも

失くしてみろたいへんだぞとか、体験まじりに語ってくれると、トンボやセミやバッタが本当らしくなるのだ。

ちよつと脱線するが、軍事教練で一番閉口したのは、穴か何かに身を隠して直進してくる戦車に向かつて火炎瓶を投げるといふ練習。あれはどういう心算だったのか？ 正しく戦車に向かう蟻螂の斧。一瞬ギョツとするほど白ける。人間に可能なことじゃない。なるほど、それほどに敗色深いのか、と、決して戦意の高揚にはならぬ。

閑話休題。軍需工場へは井の頭の公園を通って行く。公園の池にはかなりの鯉がいた。そろそろ通りながら、そのうち何時かこの鯉を獲って食べようとする人が出てくるぜ、と笑い合つたが、鯉の姿はなかなか消えなかつた。そのうち飽きてしまつて注意しなくなつたが、昭和二十年の何月だつたか、あれ、居ないぞと叫んだので覗くと、確かに一尾も見当たらなかつた。二、三日の出来事だつたと思う。へえ、本気に食べる人がいるのだらうか、が話題だつた。

なぜこんなことを書くのか。私は、戦争・敗戦時を回想して多くの人が一様に「飢えた」と言うのを聞くと、耳を覆いたくなる。ときには、嘘を吐けと思う。

飢えには、飢えの思想があるはずではないか。そんなものは見たこともない。

飢えの独自の経験、独自の記憶、個性的でリアリスティックな細部があるはずではないか。そんなものは聴いたことがない。

どだい、私の経験でよければ、戦後四、五年は却つてその声は聴かれなかつたと思う。

「あの頃は飢えた」とみなが言うようになったのは、いつ頃だろう？ 昭和二十年代末頃からで

はあるまいか。

つまり、敗戦を通過して、生活が安定して、ホッと一息ついたとき、自己満足のあげく「あの頃は飢えた」などと言ってみたのだ。

ことに、戦争・敗戦で大して傷付かなかった者こそ、却って声を大きく言ったのだ。

今日になるともっとひどい。今日の自分の生活に満足し切った中流意識の成功者こそが、おかしなことだが、得意満面に「あの頃は飢えた」と言うのだ。なぜ得意顔になるのだろうか。

本当に飢えた人は何も言わなかったのだ、と思う。確かに簡単に言えるようなことではない。

だから、簡単に飢えたと言うとき、われわれがその言葉の中身として盛り付けているのは、食糧確保の手柄話や、食物工夫の自慢であり、また、俺は苦勞して生きたんだぜという蛙の腹のごとく脹れた自己満足である。

なるほど、敗戦当時しばらくは、駅の地下道や上野の山で死んでいく人達の記事が出ていた。

飢え死したのだと言われた。たぶん彼等は戦災罹災者であろう。

あれを飢え死と言うのか。それなら、われわれの言う「飢え」とは何の連続もない。

あれを飢え死と言うのか。いや、誰も救う者がいなかったから、われわれの冷酷によって突き放され、見捨てられたから、死んでいったのだ。

戦災浮浪児こそ飢えの姿だ。彼等の唇の詩はこんなものか。「乞食」という言葉が輝くドラマなので、ここから採った)

「食にことかき、履物もなく、荒れはてた森をさまよったこといくたびか、雨に、焼きつける日ざしに悩んだこといくたびか……」（ソポクレス『コロノスのオイディプス』高津春繁訳）

いまは死んでしまったある戦災浮浪児出身の作家に、あなたはこれまで何を支えに生きてきたのか、と訊いたら、彼は言下に答えた——親類縁者への憎しみで生きてきた。

しかしことによったら、あの「あの頃は飢えた」の流行は、もっと全然違った意味のものかもしれない。

要するにわれわれは、戦争・敗戦を、極端に良く言うか、極端に悪く言うかのいずれかであって、自分の経験に添って、戦争・敗戦についてごく普通に語るといふことを、ほとんどしてこなかったのだ。言葉が貧困だった。だから、戦時中自分は生きいきしてよかったとか、敗戦時は面白い観物だったというようなことを、あの「あの頃は飢えた」に代表させ、そこで、ニッコリ面白そうに話すそんな仕組みになるのかもしれない。

買出しもやってみた。最初は家の命令ではない。同級生があちこちで、やあお前も行ったのか、などと情報を交換しているの、どうやるの？ と訊くと、「お願いします、少国民が来ました」と言つて一軒ずつ回るのだという。仲間に入れてもらつて、家からの資金を懐に一緒に回つてみたが、すべてけんもほろろとはこのことであつた。

買出しには少年が有利だった。たまに警官に尋問されても、親が病気で困っていると嘘を吐